

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



明治43年 鶴舞公園

池田 誠一

【4】大名古屋土地博覧会…大正から昭和へ

1 市域の拡大

明治時代の末、名古屋は、築港・新堀川、東部・南部道路等、当面する大きなプロジェクトを推進してきました。しかし、急速に成長し始めた都市を考えると、その将来を見据えた計画的な都市づくりが必要でした。なかでも、急増する人口に対して将来の市域をどうするかは大きな問題でした。

当時の市域は南部の熱田町等を合併したことから南北に広がり、細長くいびつな形をしていました。面積も、東京、大阪、京都、神戸、横浜といった6大都市の中で5番目と小さかったのです。そのため急拡大する名古屋の影響は市域外にも拡大し、計画的な整備が不可欠になっていたのです。

しかし、まだ都市計画法はなく、「市区改正」という首都・東京の都市計画ルールしかありませんでした。そのため明治44年の市会で、市区改正を考えるべきではないかという建議があり、採択されたのです。そして専門家を加えた市区改正調査会がつくられ、改めて都市の将来のあり方が議論されました。今回は、

この都市計画を引き金に進んだ市域の拡大とそれが生み出したものを考えてみたいと思います。

2 都市の広域化

(1)大合併

市区改正調査会は市長の意見書にもとづき議論をすすめ、将来の拡大市域、道路・河川・公園等の計画が初めて議論されました。しかし市域のあり方をめぐっては高密化か広域化かで賛否があり、市域問題は市長の交代を待たねばなりませんでした。そして大正7年、法的に市区改正の準用都市になりましたが、翌8年には都市計画法が成立したため、議論はそちらに引き継がれることになりました。

都市計画では、まずその範囲を決めますが、この範囲は、新法では将来のことを考えて市域外も含むことが出来ました。そのためその議論が始まりましたが、意見はむしろ周辺の合併の方を選択し、その促進へと舵を切ることになったのです。

9年、市は将来を想定し、隣接する19町

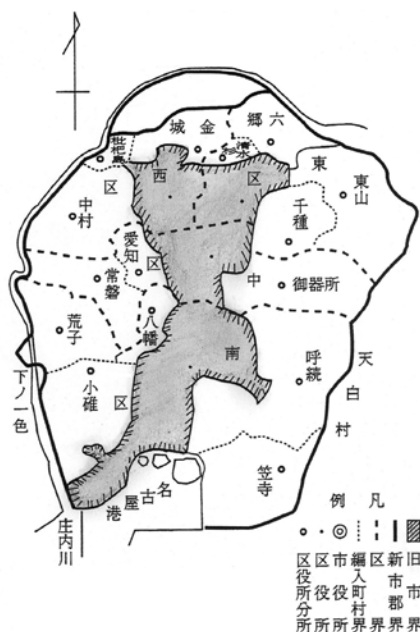


図1 市域の変化と編入町村(文献②)

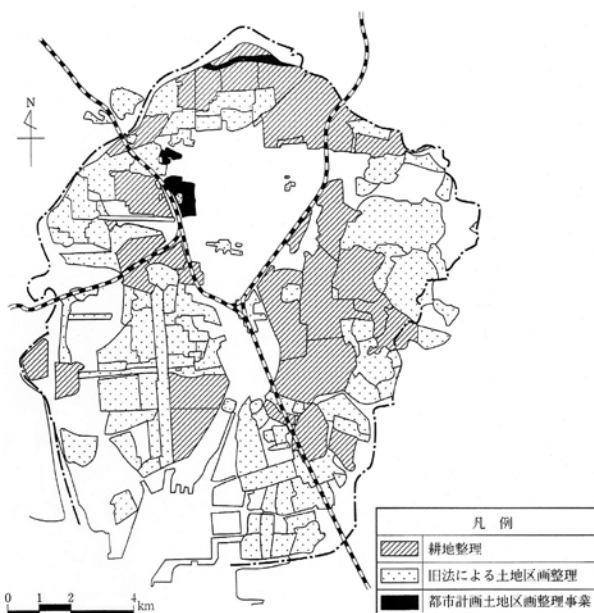


図2 名古屋の区画整理。戦前の耕地整理、区画整理(文献③)

村に合併を要請し、同時に県に申請しました。各町村は連合して協議して「時期尚早」という答を出しました。市は強硬案でしたが、県は無理と考えたため、合併論は一旦頓挫することになったのです(この時期の経過には憲政会と政友会の政争が絡んでいるようです。)

10年になって、内務省は名古屋の都市計画区域案を公表しました。それを機に、知事の交代もあって合併論は再び動き出しました。そして県は、市と周辺市町村に対し、21町村の編入を諮問したのです。市は1町を除いて承諾し、一方町村は条件が認められれば編入を可としました。それを見て、県は21町村の原案を可決しました。

ところが内務省は、名古屋市と各町村の係わりから疑問を呈し10町村を減らそうとしました。が、最終的には市の要望を入れて除外は5町村とし、残りの16町村の編入を認め、許可指令をしたのです。県は即日施行を告示しました。

大正10年8月、名古屋市は16町村を合併し、人口は60万人を越え、面積は以前の4

倍の150km²に増えました(図1)。そして人口では東京、大阪に次ぎ、面積は一転、最大の都市になったのです。

(2)区画整理ブーム

都市計画法の制定と市域の拡大。この2つは名古屋の市街地開発を促進するきっかけになりました。名古屋市の周辺では、それまでも耕地整理法を運用して宅地開発をしていましたが、「耕地」を「宅地」とすることは厳密には違法行為でした。ところが都市計画法は宅地開発の区画整理に耕地整理法の準用を認めたのです。新しい市域では競って区画整理が始まりました。

この大正10年の合併から昭和3年までの7年間に新市域で耕地整理組合や区画整理組合を立ち上げたのはなんと44組合。面積は37km²(旧市域面積に匹敵)にもなります。もちろんその頃耕地整理を進めていた組合も、宅地計画に設計変更することになりました(図2)。区画整理は、同時に道路など都市計画の施設をその中に組み込んで計画します。

そのためその範囲は、自動的に都市計画の道路が確保されることになりました。

(3) 御大典奉祝博

その最盛期の昭和3年。日本は昭和天皇の即位で、全国で奉祝のイベント等が行われました。東京、大阪、京都等の大都市は博覧会が。他の都市でも様々な博覧会や施設建設等が行われています。



図3 御大典奉祝名古屋博覧会の会場図

名古屋市も「御大典奉祝名古屋博覧会」(以降、御大典博)が開かれることになりました。(御大典とは大嘗祭と即位式を合わせたもの。)博覧会は、9月15日から11月23日まで。会場は鶴舞公園です。ただし鶴舞公園は公園が完成していたため共進会の時のように全部を使うことはできず、公園の南のグラウンドを中心とし、南部から東部にかけてが会場になりました(図3)。

開催してみると、やはりたくさんの方の入場者がありました。会期70日間で194万人が入場し、成功裏に終わったのです。

(4) 土地博覧会

実は、この博覧会の横でユニークな博覧会が開かれていました。「大名古屋土地博覧会」(以降、土地博)です。それまでは、多くの宅地が開発されているのに、それを宣伝し、売却を促進するシステムがありませんでした。

そこで、区画整理を推進していた県や市や都市計画の専門家等で作る「都市創作会」が、御大典博の集客力を狙って土地の博覧会を企画したのです。期間は10月の1ヶ月。会場は鶴舞の御大典博の正門前を本館とし、市内の区画整理地区が現地会場です。参加組合は約60。本館で人を集め、「自動車」で市内に広

がる区画整理中の現地会場に案内し、当時興味を持たれていた「郊外」を紹介しようというものでした。

本館では、各組合の紹介を大型の絵画や模型で行い、立派なパンフレットもつくりました。自動車は12台。市内を方向別に4コース設定し、5人乗りの車で通送式に運んだのです(図4)。

土地博は1日平均8～9千人の入場者を集め、しかも尻上がりに増えました。そして、

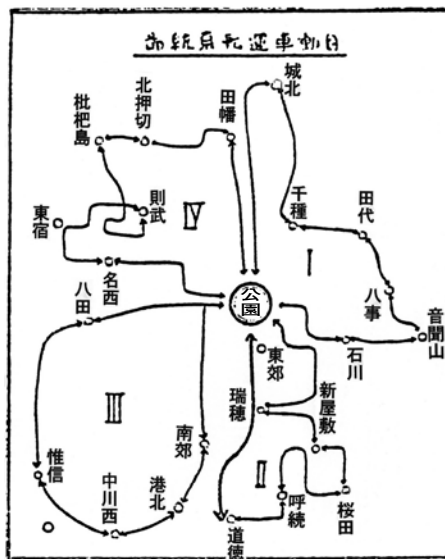


図4 土地博の自動車の系路。
市内を4つに分けて、各組合を回った

- など、以後の区画整理に大きな影響を与えることになりました。御大典博、土地博の連携は、都市づくりに大きな影響を与えることになったのです。

… 御大典博と土地博 …

JR鶴舞駅を出ます。鶴舞駅は、この御大典博の時に仮の停車場として開設されたのが始まりです。

A wide, paved path lined with tall, mature trees, leading towards a building in the distance. A row of parked motorcycles is visible on the right side of the path.

は共進会の時は広場でしたが、この時は周りは緑に変わっていました。進むと右側は、当時から数えると何代目かの図書館です。左側の林の中には日本家屋が見えます。「鶴々亭」です。御大典博の時、茶席の参考品として名古屋材木商組合が出品したものが今日に残りました。

突き当って右に。道なりに進むと右側に門柱があります。これは大正7年に大須から移された動物園の入り口で、ここから南にかけて1.2km程ありました。道の左側は広いグラウンドです。ここをいっぱい使うように田の字型の博覧会の本館が造られました。

平成25年4月号



元区長・吉田禄在の寄付した吉田山。
ここに貴賓館や猿面茶席があったが戦災でなくなった

がつくられました。

〈土地博会場へ〉

左下に龍ヶ池を見てUターンし、道を南寄りに進みます。緑化センターの入り口を通り、噴水の手前で左の緑の中に入ると、「普選壇」があります。普通選挙法の施行を記念して新聞社が建造したもので、完成は御大典博の直前でした。そのため屋根で覆って博覧会の開会式に使われた他、野外劇場としても活用さ



名古屋新聞社が寄附した普選壇には五か条の御誓文が書かれている。博覧会では開会式などが…



土地博の会場は工事中の公会堂の手前につくられた。
噴水の反対側が御大典博の本門になる

れました。

道に戻り、噴水に向かいます。噴水の南側、グラウンドに向かう道の入り口に御大典博の本門がありました。北を見ると、正面は公会堂ですが、当時はまだ工事中でした。その工事現場と噴水の間に、大名古屋土地博覧会の会場がありました。まさに御大典博の入場者を取り込む配置です。ねらい通りだったこの配置が博覧会の成功で名古屋の区画整理に大きなインパクトを与えたのです。

4「大名古屋」

大正中頃から昭和初期にかけて、市域の拡大とその中の宅地開発によって、名古屋市はまた一つ脱皮を遂げることになりました。

都市計画の事業では、5大幹線道路が定められ、都市の骨格作りが進められました。拡張された新しい市域では、区画整理が進められ、宅地化が進みました。そして「土地博」によって都市計画に広範な市民を巻き込むことが出来たのです。

当時から名古屋でよく使われるようになった言葉に、「大名古屋」があります。この「大」は今日でもいろいろな意味で使われます。が、当時は市域が4倍に増え、人口も東京、大阪の次ということになり、まさに「大名古屋」という実感がありました。ここでも、名古屋は博覧会と街づくりが大きく係わって成長を遂げたといえそうです。

〈主な参考文献〉

- ①同編さん委員会『愛知県史資料編26近代3』
(2004、愛知県)
- ②同編集委員会『新修名古屋市史資料編近代2』
(2009、名古屋市)
- ③同市計画局他『名古屋都市計画史』
(1999、名古屋都市センター)
- ④石川栄耀「大名古屋土地博覧会報告」
(1928、『都市創作』4・11)